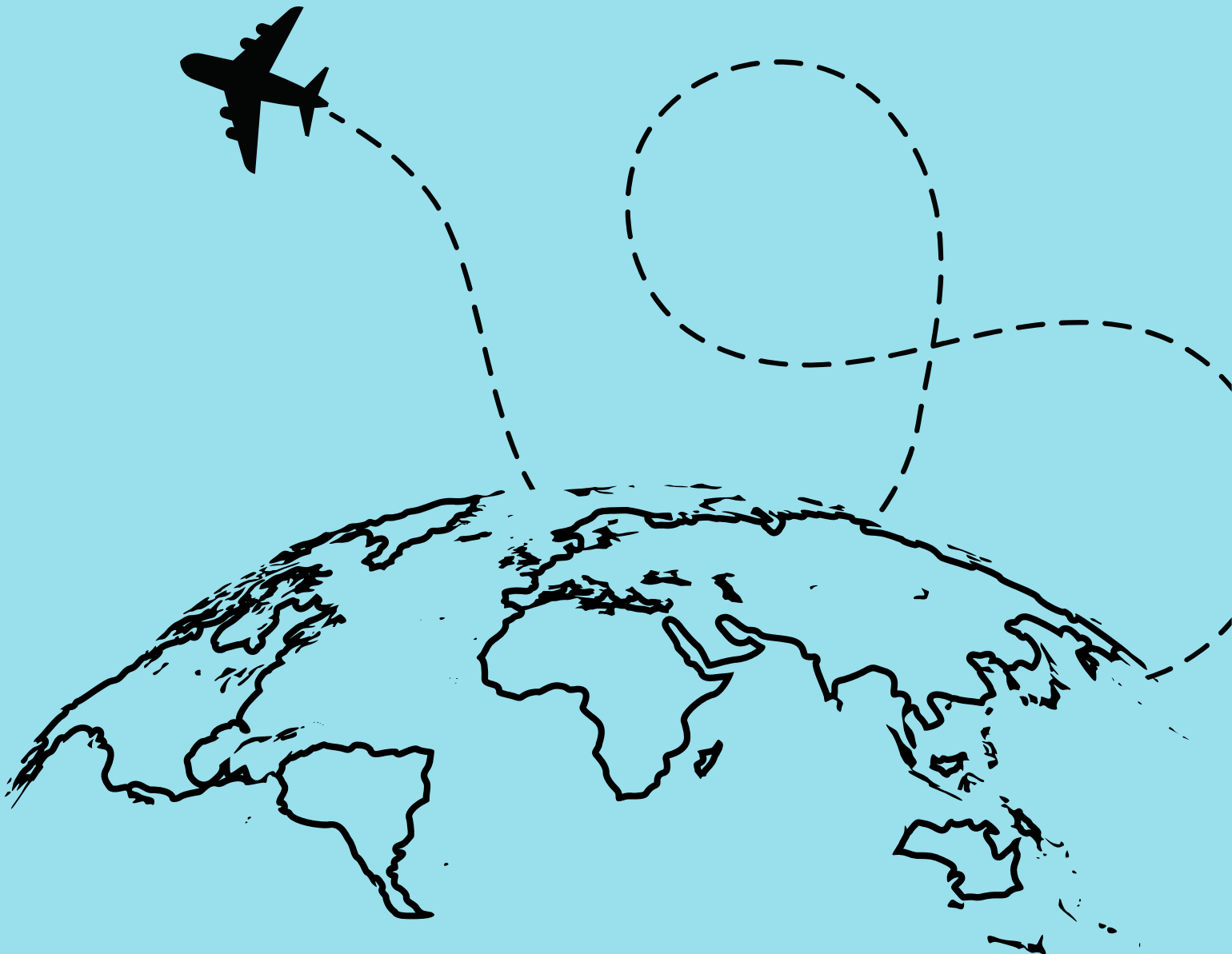




Beyond Tsumatama SGL

Tsumatama - Global Education Program 2023 Report



Otsuma Tama Junior and Senior High School

駐日トルコ大使講演会

5月11日（木）の放課後、コルクット・ギュンゲン駐日トルコ大使をお招きしての講演会を開催しました。

今年2月に発生した「トルコ・シリア大地震」の後、学校で募金活動を行ったことや本校がトルコ・セミナーを実施していることなどから、講演会の依頼を喜んで承諾していただきました。

当日は朝と講演会前後で高3の有志生徒が再び募金活動を行いました。この日で76,625円の募金が集まりました。8万円にしてトルコ大使館へ寄付させていただきます。

講演会には生徒約90名と保護者約30名それに教員も参加し、盛況でした。司会進行は募金活動も行ってくれた高3の生徒が務めてくれました。ギュンゲン駐日大使にはトルコの国の紹介、日本とトルコとのつながり、このたびの大地震についての話をお願いしていましたが、豊富な写真と分かりやすくまとまった説明で、大変有意義な講演だったと思います。質疑応答の時間には中学1年生をはじめとてたくさんの質問がありました。（質問を積極的にしてもらって大使も喜んでおられたそうです）最後には生徒全員が登壇し、大使と記念写真を撮りました。

大使も、通訳兼秘書の方も穏やかな人柄で、和やかに講演会は終了しました。多くの生徒がトルコという国への理解を深め、行ってみたいと思ったことでしょう。

司会生徒感想（高3 Kさん・Mさん）

駐日トルコ大使のコルクット・ギュンゲン大使から、トルコの歴史や文化、トルコ・シリア地震について直接お話を伺う貴重な機会を頂き、トルコについて知見を深めることができました。その時のトルコ大使の気さくな話しぶりが印象に残りました。

トルコの伝統・文化は私たちにとって目新しいものが多く、とても興味深かったです。例えば、トルコでは多くの民族が共存しており、それぞれの文化に応じた建物や習わしが混ざりあっています。日本とは違ったそのトルコの空気感に驚き、私自身もトルコに行ってみたくくなりました。

今年二月に起きたトルコ・シリア地震から数か月がたちましたが、被害は大きく、いまだ復興作業が続いています。地震が多いという共通点を持つ国として、またトルコと親密な関係を持つ国として日本も支援策を打ち出しています。大妻多摩においても校内で募金活動を実施しました。生徒の皆さんや保護者の方々にも積極的にご協力していただき、トルコの復興に貢献することができたと思います。

日本とトルコの二国間の歴史は深く、過去に大きな地震の被害にあった際には互いに助け合ってきました。このつながりを大切にし、発展させていきたい、といった大使の言葉がとても印象に残っています。私自身も、ひとりの学生としてできることをしてトルコの被災地復興に努めていきたいです。

被災された方々が一刻も早く安心できる暮らしを取り戻せるよう願っています。



ISEF にて「文部科学大臣特別賞」を受賞！

約 1800 人の高校生による世界最大級の科学技術コンテストである ISEF（アイセフ、International Science and Engineering Fair の略）に出場した高 3 の小笠原さんは、その功績が認められ「文部科学大臣特別賞」を受賞しました。

また、8 月中旬には名古屋にある日本ガイシ株式会社の本社に招待され、工場内や最先端の電池の研究開発現場を見学しました。若手社員さんとの交流の機会もつくっていただき、自身の将来をイメージする貴重な経験となったようです。

本校では高校 1 年生の「総合的な探究の時間」で論文作成に取り組んでいます。テーマは各自が自由に設定します。小笠原さんは、この探究の授業で取り組んだ成果をブラッシュアップし続け、さまざまなコンテストに出場しました。過去の受賞については、HP 関連記事をご覧ください。



参加生徒感想（高 3 小笠原さん）

私は高校 1 年生の時に研究を始めました。学校や学会や研究所は利用せず、自分の部屋で一人ですずっと研究してきました。高校 1 年生の時に 1 つ、高校 2 年生の時に 1 つ賞を取り、もっと大きなコンテストで自分の研究の成果を試したいと思ったことをきっかけに学校の先生に頼み、JSEC2022 に応募しました。JSEC に応募した時、最終審査まで残れたら嬉しいなくらいに思っていました。最終審査に残ったという事を部活中に先生から告げられ、泣いて喜んだのを覚えています。JSEC 最終審査会の時期にちょうど部活の全国大会が重なってしまい、とても忙しく、辛い日々でした。最終審査会では、どの生徒もとても魅力的な研究をしていて、研究内容だけで勝てる試合ではないと確信したため、部活で培ったニコニコ笑顔で自信を持って、周りの誰よりも印象に残るプレゼンをする事を意識しました。1 日目にいただいた改善点は 2 日目までに直し、2 日目は自分の中の全力を出し切りました。

その結果、「日本ガイシ賞」をいただき、ISEF 出場への推薦をいただきました。

（引用：ISEF＝世界 80 以上の国から約 1800 人の高校生が集まり、科学の研究を競うコンテスト。審査委員は約 1000 人、賞金総額は約 400 万ドルという世界最大級の大会で、主催は科学雑誌の発行や教育的な科学コンテストを手掛けてきた米国の非営利団体 Society for Science。毎年アメリカの都市で開催される。大会は審査だけでなく、参加者同士が交流する機会がたくさん用意されている。）

学校の定期考査と ISEF の時期が重なってしまい、私の望む進路を考えると定期考査はとても重要であるため、ISEF への参加にすぐに同意は出来ませんでした。しかし、学校の協力もあり、全力で ISEF に臨むことが出来ました。結果的に ISEF に参加してよかったと断言できます。

「日本ガイシ賞」をいただいた時は全く実感がなく、ISEF に向けて目の前にあるタスクをこなしていくうちにだんだん実感が沸き、自分の研究に自信が持てるようになりました。ISEF への準備はとても多く、やはり学校の勉強との両立がとても大変でした。SONY の研修では NSS の方々など多くの方々の支えにより、自分の研究を更に成長させることが出来たと共に、自分自身の研究への理解も深まりました。

ダラスへ行く当日、あまり知らない子達と英語圏で 1 週間も生きていけるのかととても不安でした。でも、Team JSEC の子達は本当に優しく、面白く、皆でチーム一丸となって ISEF に臨むことが出来たと確信しています。Speaking と Listening には自信が無かったですが、多くの人の支えにより、あまり困ることなく生活できました。

ISEF ピン交換会では 200 人以上の海外の生徒と交流することができ、今でも連絡を取っている友達もい

ます。海外の友達とのメールは、英語での略語の使い方を教えてもらい、生きた英語に接することが出来ます。

ISEF 審査会当日は体調が悪くなってしまったのですが、周りの方々の支えのおかげで、何とか全力でやり遂げることが出来ました。体調が悪く、ホテルで寝ていた時に、Team JSEC の仲間達が、お味噌汁とお茶漬けを作ってくれました。良い仲間ができたことを実感しました。

また、ISEF で私の研究に興味を持ってくださった台湾企業での研究発表の参加権を頂きました。更に、「文部科学大臣特別賞」も頂きました。高校 1 年の教室でふと閃いた一つの研究材料の種がどんどん大きくなっていきました。是非、皆さんも小さな閃き、興味を大切に育ててほしいと思います。それは、他の誰もでない今の自分にしか考えられない研究の入り口かもしれません。

探究の授業を調べ学習ではなく、自分で考えて取り組む有意義なものにしてください。ISEF を側で応援してくれた家族や先生方や友達に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

夢実現に向けて、今後も研究を進めていきます。

Tokyo Global Gateway (TGG) Green Springs (in 立川) 体験



7 月 26 日、高 1～高 3 の 8 名で、2023 年 1 月 16 日にオープンした TGG Green Springs のプログラムを体験しました。昨年度、トライアル校として利用させていただき、今回は ESS 同好会メンバーを中心に本格的に利用しました。

今回は昨年よりレベルの高い、「プログラミングを体験しよう」と「東京の魅力を紹介しよう」の 2 つのセッションに挑戦しました。文系・理系に関わらず、プログラミングは今後生徒達にとって必要なスキルとなってきます。当日はグループで与えられたタスクをこなし、協力しながらプログラミングを体験できました。また、インバウンド需要により、東京都内には外国人観光客が年々増加しています。そこで、東京の魅力について再確認し、東京の魅力を英語で紹介し合いました。当日初めて会うメンバーもいましたが、流石高校生。どのグループからも東京の魅力が感じられました。

来年度以降も希望者対象に利用できたらと考えています。

参加生徒感想（高 2 S さん）

今回は外国人講師の方が 2 人担当してくださいました。最初に自己紹介をしたあと、ちょっとしたミニゲームをしました。一緒に笑ったり、考えたりする中で、講師の方だけではなく、一緒に参加した本校の生徒とも距離を縮めることができました。その後、当日のプログラムの一つである、『ロボットをプログラミングして指示された模様を、ペンをつけたロボットを動かして描く』というプログラムに参加しました。講義中はみんなが積極的に意見を言っていたのが印象的でした。ロボットに指示を出すのは難しく、たくさん失敗しましたが、講師の方が優しく教えてくださり、模様が完成したときはとても嬉しかったです。

一つ目のプログラムが終わった後は、お昼休憩に入りました。休憩中に TGG さんのご好意で別のプログラムで使う飛行機の機体のセットを見学させていただきました。座席は実際に ANA が提供しているらしく、本当に飛行機に乗っているような気分を味わうことができました。

お昼休憩が終わって次の『東京の魅力を再発見しよう』というプログラムが始まりました。午前中のプログラムに比べて、発言したり、みんなで協力して考えたりする機会が多くとても楽しかったです。最後は外国人観光客のために東京の場所を勧めるプレゼンをしました。準備の時間が短くて、練習する時間が

なかったのですが、発表がうまく行ってよかったと思います。そして最後に当日の振り返りをみんなでした。講師の方が『今日はどんなことをしたっけ?』『何が一番楽しかった?』『なんでそう思う?』と色々な質問を投げてくださいだったので、とてもいい振り返りができたと思います。また、『こんなにコミュニケーションをとってくれる生徒はなかなかいないので、こちらも授業をしていて楽しかった』と言ってくださってとても嬉しかったです。

今回 TGG に参加した感想は、講師の方々が楽しい雰囲気や発言しやすい雰囲気を作ってくださいだったので、最初は少し緊張していましたがすぐになくなって、心から楽しむことができたのがとてもよかったと思います。そして、そんな雰囲気の中で授業に関することだけではなく、『どのくらい日本に住んでいますか?』『日本語を勉強していて何が一番難しいですか?』など色々なことを講師の方に聞くことができて楽しかったです。また、授業を通して自分が知らなかったことを新たに学ぶことができたので良かったです。プログラムを通して英語でコミュニケーションをとる楽しさや、英語に対する自信をさらに高めることができたのでとても良かったです。また、同時に今後の英語学習への意欲も高めることができたと思います。ぜひまた機会があれば参加したいと思います。



中2 グローバル・キャリア・フィールドワーク〔グロキャリ〕(4泊6日)



6年間の中で生徒が最も楽しみにしている、オーストラリアへの修学旅行。コロナ禍以前にも中2の希望者によるオーストラリアへのグローバル・キャリア・フィールドワークは実施されていましたが、今回ついに中2全員参加で実施することができました。前・後半に分けて、3・4組は7月19日の終業式に出席してから出発、1・2組は3・4組が帰国した後の26日の出発でした。

グロキャリは「語学研修」ではなく「キャリア研修」を目的とした4泊6日のプログラムです。オーストラリアの姉妹校、ブリジディーンカレッジの生徒との交流、クィーンズランド大学のキャンパスツアー、現地で働く日本人へのインタビューを実施し、海外大学進学や海外就職も進路選択肢の1つであることを認識できました。中1後半から事前学習を行い、帰国後「現地で学んだこと」についてグループでプレゼンテーションを行い、英語や海外への興味・関心を高め、今後の探究活動等へつなげていってほしいです。

参加生徒感想(中2 Hさん)

私は今回のグローバル・キャリア・フィールドワークでたくさんのことを学ぶことができました。その中でも「世界には様々な人がいる」ということ、「海外で働くのは身近になっている」「日本とは考え方の違いがある」という3つのことが印象に残っています。

「世界には様々な人がいるということ」を知ることができたのは多民族国家であるオーストラリアだからこそ分かったことだと思います。そんなオーストラリアだからこそ英語が話せることが当たり前ではないので、英語が苦手な私でも「間違っても大丈夫!」と挑戦してたくさん話すことができました。言語については現地で働いている日本人に話を聞く際、「自分の子供の見た目は日本人だけど日本語を話すことができないので、日本に行ったとき日本語で話されてとても困った」という話を聞きました。その話を聞いて、確かに「見た目が外国人だったら英語を話せるのが当たり前」と思ってしまうことに気が付きまし

た。これからは見た目通りの言語が話せるわけではないということをみんなが念頭において、誰もが見た目との違いで悲しい思いをしないようになっていけたら良いと思います。

「海外で働くことが身近になっている」ことを知ることができたのは、現地で働いている日本人の方に話を聞いたことで今まで他人事だと思っていたことを自分ごとに考えることができたからです。また、英語がほとんど話せない状況でオーストラリアに行った方が現地で普通にお仕事をされていることを聞いていて英語が苦手な人でも海外で〇〇がしたい！やりたい！！という強い気持ちがあればすべての人に可能性は広がっていくと思いました。また、海外で働くこと以外にも自分に合った仕事の見つけ方なども知ることができました。

「日本との考え方の違い」は日常生活のいろいろな場面で感じることができました。日本にいた場合、着たい服があっても「似合わないから」、「周りの目が気になるから」とほかの人からの評価などを気にして着ないところを、オーストラリアではそんなことを気にせず自分の好きな服を自由に着ている印象でした。発言の仕方も服装と一緒に周りのことは気にせず自分の意見を率直にどんどん言っていました。自分らしさを表現したり自分の思いを発信できることはとても素敵なことだと感じました。私もそんな風になっていけたら良いと思います。また、初対面でもフレンドリーに声をかけてくれる人がたくさんいました。英語に敬語というものがいないからこそフレンドリーな印象を与えられるのではないかと思います。

グローバル・キャリア・フィールドワークから帰ってきた後は、オーストラリアで学んだことをプレゼンする授業があり、自分だけでなくクラスメイトの意見も聞くことができました。同じ経験をしてきても自分では気づかなかった友達の学びを知ることができ、また改めてグローバル・キャリア・フィールドワークでの経験が自分にとってかけがえのないものになったと再認識することができました。出発前は英語が苦手なのでとても不安でしたが話さなくてはいけない状況に置かれたことで、「間違っていたとしても挑戦しよう！」と思う勇氣を持つことができました。オーストラリアで現地の高校生や大学生、働いている人と関わらせていただき、英語だけではなくたくさんのこと学ばせていただきました。この機会を得た貴重な経験をこれからの人生に活かしていきたいです。



参加生徒感想（中2 Wさん）

私は、約三年間コロナで中止されていた4泊6日のグローバル・キャリア・フィールド・ワークにクラスメイトと参加できとても幸運でした。出発にあたり私たちは事前学習を行い、現地で働いている人へのインタビューや姉妹校であるブリジディーンカレッジでの交流会で、どのような話をするか事前に準備しました。オーストラリアに到着してまず感じたことは、日本との気候の違いや町の美しさです。オーストラリアの街中は高いビルがあまりなく、通りは想像以上に広くとてもきれいですごく驚きました。また、自由行動で私たちのグループは「ミートパイ」が食べたかったのですが、売っている店がわからず困っていたら、見知らぬ通りすがりの人が3軒のパン屋に問い合わせの電話をかけて下さり、オーストラリア人のやさしさに触れ非常に感動しました。



今回のグロキャリで一番印象に残っているのは、実際現地で働く日本人の方に会ったことと、姉妹校を訪問したことです。まず現地で働く日本人に質問する機会があり、私は2つ質問をしました。初めに「な

「オーストラリアで働こうと思ったのですか？」と尋ねると「英語を上達させたい」「海外に行きたい」「ホームステイをしたい」また、「オーストラリアは自然が豊かで治安が良い」という答えが返ってきました。また思い立ったら直ぐ行動に移すことが大切だと話されていた言葉が強く心に残っています。次に「オーストラリアと日本の違いは何ですか？」と質問すると、「オーストラリア人はプライベートを充実させるため仕事の残業をせずに直ぐ家に帰る」とのことでした。これを聞いてオーストラリア人は家族との時間を大切にしていってとても素敵だなと思いました。

次に姉妹校訪問時のことです。コミュニケーションをとろうと試みましたが、今の英語力では自分が思うように話せず会話が続きませんでした。うまく自分の気持ちを伝えられなかったのが本当に残念でした。なので、私はもっと英語を学び多くの外国人とコミュニケーションが取れるようになりたいです。そのため、多くの海外プログラムに積極的に参加していき、今やらなければならないことは直ぐに行動に移す、日常生活で英語に触れる機会を増やすことが大切だと思いました。

また、ブリジディーンカレッジでその生徒と一緒に授業を受けた際、机に向かわずグループごとに床に座ってコミュニケーションをとるスタイルで、とても新鮮で驚きました。なぜなら、日本ではふつうしっかりと椅子に座り授業を受けるからです。ブリジディーンでは授業の受け方が自由で、私もほかの生徒たちも楽しく授業を受けることができました。日本にもこのようなスタイルを時々取り入れてみるのもいいのではないかと思います。そうすることによってコミュニケーションがさらに活発になり、より楽しく授業を受けることができると思うからです。

現地で様々な体験をすることを通して、今後もっと色々なことにチャレンジしようと思い、将来の視野を広げることができた貴重な6日間でした。

I had a good time in Australia! I want to improve my English skill. Moreover, I want to go to Australia for a term study abroad. I love Australia !



英国セミナー（14日間）



7月23日(日)～8月7日(月)に、本校主催の英国セミナーが開催されました。このプログラムは、英語のコミュニケーション能力の向上と英国のライフスタイルを学ぶことを目的としています。2019年の夏以来、4年ぶりの実施でした。久々の開催とあって、高校2年生16名、高校1年生21名、中学3年生12名、総勢49名の大人数が参加しました。

生徒たちは2週間、イギリスのご家庭でホームステイをしました。滞在したのはロンドンからバスで西へ2時間ほどのところに位置するコッツウォルズ地方のグロスターという街です。

盛りだくさんの内容でしたが、言葉や生活様式の異なる文化圏での経験を通して、生徒が一回り成長できるセミナーとなりました。

参加生徒感想（高2 Iさん）

私は今回の英国セミナーに心の底から参加して良かったと思うことができたのでイギリスでの経験や自分がどのくらい成長することができたのかについて書かせていただきます。

今回の英国セミナーは私にとって英語だけでなく人間としての自信を身につけるきっかけになりました。私は英語が決して得意とは言えないのですが、英語力を確実に上げたいという思いがあった為、ホームステイをシングルで参加させていただきました。その為 16 日間も 1 人で過ごせるのか、ホームシックにならないか、英語の授業は大丈夫か、食事は合うのか、何よりホストファミリーと仲良くできるかなど心配なことがたくさんありました。しかし、山根先生や荻野先生、添乗員の方、現地の英語の先生、何よりも温かいホストファミリーに助けていただき大変助かりました。午後のアクティビティー、コッツウォルズやバースなどの観光、オックスフォードの大学生との交流や現地の高校生とディスカッションなど、イギリス人の先生やアシスタントの現地の学生さんとの会話をより充実したものにすることが出来ました。また、ホストファミリーとの日常生活での何気ない会話や、休日に連れて行ってもらった海やショッピングモールなどを通して忘れられない思い出がたくさんでき、楽しい時間を過ごすことができました。

そんな数多くの思い出の中でも特に印象に残っているのは挨拶です。初めての買い物の際お会計の後に店員さんから “Have a good day!” と声をかけられたのは日本人の自分にとってほとんど無い経験で驚きましたが、とても心地が良く幸せな気持ちになりました。また、私がお世話になったホストマザーはご近所さんを朝見かけると必ず車から大きな声で “Hello” や “How are you?” など元気な挨拶をしていました。日本ではあまり見かけない光景でとても素敵だと感じました。他にも朝、学校に向かう際、全く知り合いでもない方から “Hello” と声をかけていただきました。初めて声をかけてもらった時は本当に嬉しく、その日はいつも以上に楽しく過ごすことができました。これらの経験は私に挨拶をしてもらうとどれだけ嬉しいか改めて教えてくれ、私を 1 人の人間として大きく成長させてくれたのではないかと思います。もちろんですが、英語力も少しは上がったと思います。イギリスでは朝のニュースや天気、買い物、ホストファミリーとの会話など全てが英語なので自然と聞く力がついたように思います。また、たった 16 日間でホストファミリーと仲良くなることができたことはコミュニケーション能力が向上したと実感しています。

英国セミナーは私にとって英語力の向上だけでなく、私に自信を与えてくれると同時にこれからの国際化が進んでいく日本を生きていく上で必要な人としての能力も高めてくれたと感じています。本当に参加することができて良かったです。



かめのりハイスクール 2023（4 日間）

【かめのりハイスクールとは】（団体紹介より）

公益財団法人かめのり財団による、「日本とアジアの若い世代が交流し、お互いを理解し、視野を広げるきっかけとなる」プログラムです。

日本語を学んでいる東南アジア（インドネシア、タイ、フィリピン、ベトナム、マレーシア）の高校生と一緒にグループで課題に取り組みます。インターネットで瞬時に何でも見つけられる今だからこそ、異なる文化を持つ人と膝を突き合わせて話し、聞き、動き、考える 4 日間は貴重な体験となるでしょう。

参加生徒感想（高 2 Y さん）

私は、「かめのりハイスクール 2023」に参加しました。このプログラムは日本、フィリピン、タイ、インドネシア、ベトナムから東京に集まって「私たちの町はサステイナブル？」について話し合います。



海外の子は日常生活の日本語を知りたい！という理由や、アニメや日本食が好き！という理由で日本に興味をもってくれた人たちが参加していました。日本人も、東京に限らず様々なバックグラウンドの人達が集まって話すことができました。

そこで私はコミュニケーションの大切さと難しさを感じました。サステナブルについて 6 人組のチームで話し合う時に日本人は 3 人、外国人 3 人でした。最初にメンバー各々の地元のサステナブルではないと思うところの案を出し合いその解決策を考えます。私がびっくりしたのは、インドネシアのある地域で町が汚いという点でした。ゴミが落ちているという事や落書きが多いこと、路上でたばこを吸っているということも上がりました。その話し合いの際、メンバーの言語力の差が発表までの短い時間のなかで話をまとめる上で難しかったです。自分も留学経験があったので、留学生の気持ちになって日本語をゆっくり話すようにしたり英語を少し混ぜながら話したりしていました。それのおかげで日本にいても海外にいるような気分になれて楽しかったです！時間はかかりましたが意見を伝えることを重視して、発表までに何とかまとめることができました。

かめのりスクールのおかげで日本が好きな外国人と仲良くなれました。日本のどこが好きなのか、どうやって日本語を勉強しているのか、などを聞くことができ学べるいい機会になりました。今でも月に 2 回ほどメンバー全員でライン電話をしながら相談しあったり日々の面白いことを共有したりしています。かめのりスクールに参加する前は自分が海外に行かないと外国人とコミュニケーションをとれないと思っていましたが、このように日本でもコミュニケーションをとれることがすごくうれしかったです。経済的な理由などで海外に行けない日本人や海外に興味はあるけどなかなか行動できない人などの後押しができる人になりたいなと思いました。将来は海外と日本をつなげる人になりたいです。



HLAB サマースクール（5 日間）

【HLAB とは】（団体紹介より）

一般社団法人 HLAB は、日本人の高校生向けに寄宿型のサマースクールを 2011 年から開催している団体です。「高校生に対して、同年代の高校生や、年の近いロールモデルとなりうるような日本人学生・海外大学生、世界で活躍される社会人の方々と交流する機会を与えることで、自分の将来について 再考し、主体的な進路選択をするきっかけを与える」ということを問題意識・目的として、東京・長野県小布施町・宮城県女川町・群馬県の 4 地域でサマースクールを開催しています。

サマースクール期間中のプログラムは、様々な学問分野を掘り下げる少人数制のセミナーや自己分析企画、また社会で活躍されている方から貴重なお話を聞けるフォーラムや、社会人ゲストの方と自分自身の悩みや将来について語り合うフリーインタラクションなどを中心に構成しています。大学生との交流企画や毎日夜行われる振り返り企画（リフレクション）では、プログラムを運営し、伴走する大学生が高校生に寄り添い、悩んでいることや将来のことについて一緒に考えていきます。

参加生徒感想（高 2 M さん）

昨年夏、HLAB サマースクール MIYAGI-ONAGAWA2023 に参加してきました。このサマースクールは高校生と日本・海外の大学生が様々な活動を通して一週間共に学び合い、新しい世界を知ることが目的としたサ

マースクールです。

私は宮城県の女川という地域に参加しました。この地域は東日本大震災で津波の被害を受け、沢山の建造物が流されてしまった過去があります。サマースクール中には、実際に街を見て回ったり、女川の街づくりをしている様々な人とお話をしたりする機会がありました。特に、新しい街女川を作ろうという市民の強い思いに心を打たれました。失ってしまった事を悲しむだけでなく、新しいことを始めようという考え方は、私も大事にしていこうと思います。また、街づくりには経済的なシステムは勿論、アートや音楽などの文化的な側面も大切で、それが市民の団結や女川の個性に繋がっていることが分かりました。

また、このサマースクールでは国際的な感覚を身につけることができました。日本語と英語を同時に使うため、普段の生活や留学では味わうことのできない経験となりました。そこで活きたのは、英語力だけではなく人に何かを伝えたいという意志でした。海外大学生によるセミナーを受ける際、英語の専門用語が沢山出てきて戸惑うこともありましたが、疑問点は質問したり、分かる部分は発言したりすることで、よりセミナー内容を理解することができました。しかし、大学についての相談をした時に英語がより理解できれば色々聞けるのになと感じることもありました。これからはもっと英語を勉強して様々なことを学んでいきたいと思います。

さらに個性溢れる参加者との交流を通して、他者との関わりにおいて大切なことを知ることができました。自己分析企画では、他者の過去や意外な経歴を知るだけでなく、自分の変化を振り返る機会になりました。また、一人45分間の自己紹介企画では、お互いに沢山質問をすることで自分や相手についてより深く考えることができました。そこから学んだことは、好奇心は自分と他者を結び、新たな発見へと繋がるということです。グローバル化が進む現在、その心を大事にして視野を広げていきたいです。

私は今回参加したことで、街づくり、国際交流、他者との関わりなど様々なことを学び、一生忘れない夏の思い出を作ることができました。

皆さんもぜひ参加して、新たな一歩を踏み出してみたいはいかがでしょうか。



Self-Development Program (ISA 主催)

参加生徒感想 (高2 Hさん)



私は昨年の夏休みに、ISAが主催している、Self-Development programに参加しました。

このプログラムは、アメリカのノーサンプトンとボストンで8月3日から8月11日の9日間行われ、新しい世界を見て、自分の可能性を広げようというものでした。外部のプログラムに参加するのは、少し不安もありましたが、「行ってみたい!」という気持ちの方が大きく、参加することを決めました。

現地では、主に午前にセッション、午後に観光をして楽しみました。セッションでは、五～六人の生徒と現地の先生一人で分かれて、グループワークをするもので、一人一人英語で発言ができる機会が多かったです。私は英語が苦手だったため、初めは自ら進んで発言をすることがあまり出来ませんでした。でも、たとえ文法がちゃんとできていなくても、誰も笑わずに、真剣に聞いてくれましたし、正しい文法を先生が優しく教えてくれたため、発言をすることが怖くなくなり、最後の方では、自分から積極的に発言が出来るようになりました。

午後は、博物館や美術館へ行ったり、キャンパスツアーに参加したり、老人ホーム訪問などさまざまなことをしました。中でも楽しかったことは、現地の高校生と交流したことです。日本とアメリカで流行っている言葉をお互いに教えあったり、それぞれの国の遊びをやったりして、楽しく英語で会話することが

でき、英語で会話することにも慣れた気がしました。

私はこの9日間、日常的に英語を使うことによって、英語に対する苦手意識が無くなったと思います。また、自分の知らない環境や文化を知ることによって「将来、海外に住むのも楽しそうだな～」と考えるくらい視野が広がったなと感じます。

勇気を持って挑戦したことにより、想像以上の貴重な経験ができたので、迷っている人がいたら、ぜひ挑戦してみてほしいなと思います。

オーストラリア ブリジディーンカレッジより留学生受け入れ



9月18日～9月29日、姉妹校であるオーストラリア・ブリジディーンカレッジより留学生を受け入れました。新型コロナウイルスの影響を受け、5年振りの留学生受け入れです。以前は2, 3名でしたが、数年ぶりの再開で留学希望の生徒さんが多く、5名もいらしています。

5名は留学を心待ちにしていたようです。来日当初は緊張も見られましたが、大妻多摩での授業が始まると、どの学年の生徒とも距離を縮め、あっという間に12日間が過ぎてしまいました。また機会

があれば、是非大妻多摩に遊びに来てください！

留学生感想① (Chloe さん)

こんにちは！

I'm Chloe Isaacs in year 11 from Brigidine college who came to Otsuma Tama in September.

My short stay at Otsuma Tama is something I'll never forget. It has been a month now, and I still message a few of my friends. One of my favourite moments is eating lunch together with my buddies and friends! Even though I was slow to respond, they patiently talked to me and taught me some words. It was so fun talking to everyone – by the end of the weeks I think I could understand what people were saying more.

I loved getting to experience a new culture – saying いただきます and ごちそうさまでした before and after a meal, and going to shrines and temples. With my host families, I got to visit many places in Japan and eat so many delicious foods! The first day I came, my buddies and I went to the Goldfish Art Museum in Ginza, and we wore yukata. I got to try Mister Donuts for the first time, and it was so tasty!

This exchange has been one of the most exciting and rewarding experiences I've had. It has been exciting; it has been new and it has been enchanting! Thank you for having me!



留学生感想② (Amelea さん)

The short Japanese exchange at Otsuma Tama High School was an amazing experience that five of us, Brigidine Students, will never forget. We are very thankful for the welcoming and compassionate

students and teachers at Otsuma Tama. Personally, as a year 10 student, I enjoyed staying with my host families and experiencing Japanese culture, in particular, I loved the Japanese food and learning in Japanese classes such as shodo and PE. We participated in many classes, and even helped teach English in some English classes. In most classes, we partook in class activities and sometimes even pop quizzes, which were quite hard, but fun! My host families were very kind and welcoming and we did many things in Tokyo together such as shopping in Harajuku and eating at restaurants like Yakiniku. We all hope to stay in touch with our host families!



The school life at Otsuma Tama is very different from the school life at Brigidine College, including changing from outside shoes to inside shoes, no technology in the classroom, and only having one lunch break. We enjoyed experiencing the cultural differences at Otsuma Tama and in Tokyo. There were many shocking cultural differences in Japan society, such as the respectful nature of all people, there were lots of vending machines and convenience stores in the streets and the train systems were very organised and useful.

The exchange experience was a once-in-a-lifetime experience, and I would recommend it to all students. Studying abroad has taught us a lot about independence and different cultures, specifically, we learnt a lot more Japanese, specifically the casual Japanese language which will be very helpful for my Japanese studies in the future.

Thank you very much, I will never forget Otsuma Tama!

バディ生徒感想①（高1 Tさん）

私は今回の留学生受け入れという経験で様々なことを体験し会得しました。その中でも特に印象的だったことを二つ紹介させていただきます。

まず、特に印象に残ったことはジェスチャーが違ったことです。

私のバディが帰国するときに日本で一番驚いたことは何かを尋ねたときに、「日本とオーストラリアのジェスチャーが違い、それに気がつくまでどうすればいいか戸惑った」と言われて、何が違うのか聞いてみたところ、日本では人を呼ぶときに手を自分のほうに仰ぎますが、オーストラリアでは手を自分のほうに仰ぐことは「向こうに行け」という意味だそうです。私はよくジェスチャーを使っていたので私が言っていることとバディが私のジェスチャーから読み取れることが違うため、すごく混乱させてしまっていたのだとその時初めて気が付きました。今までジェスチャーに特別性を感じたことはなかったのですが、文化が異なる人と話すときはジェスチャーの意味を確認して会話をしたら誤解を作らずに済むと学びました。また、このことでしっかり表情も会話のときは意識することの大切さを実感しました。ジェスチャーの意味が全く違う意味でとられてしまっても、表情で自分の感情を伝えられれば相手はそこから私の言いたいことを理解してくれるからです。

二つ目に印象に残ったことは、やはり言語が違うことの大変さです。いつも机上でやっていることを実生活に投入することは容易なことではありませんでした。英語の問題を解くときは紙に文字が出されてじっくり考えることができますが、会話をしている時に長い時間は取れないので、いかに自分がわかる文法、単語でバディと意思疎通ができるかに集中しました。バディが私のつたない英語や簡単な日本語から私の意思をくみ取ってくれたおかげで一週間一緒にコミュニケーションを取ることができました。



留学生受け入れは今まで経験したことがない体験で当日まで不安や緊張があったりしましたが、実際に相手の子が来てくれると本当にそういう気持ちはなくなって、確かに大変なことはありますが、ほとんど楽しいことばかりで『受け入れて楽しかった、またやりたい』という気持ちになりました。留学生を受け入れて同じ学校に通うというのはどこでもできるものでない、自分も相手も成長できる貴重な体験です。この経験のおかげで今まで他人事だった異文化の人と接するということの実感が持てるようになりました。私は3月に日本からオーストラリアに行きます。むこうでバディと会えることがとても楽しみですし、向こうに行って自分がどんな風に成長できるかもとても楽しみです。

バディ生徒感想②（高1 Nさん）

留学生との交流は、とても有意義で貴重な経験だったと思います。この経験を通じて様々なことを学ぶことができ、4人の留学生たちにも感謝しています。初めは、誰かを家に泊めるのは初めてだったので、とても緊張していました。しかし時間がたつほど緊張も和らいでいき、楽しく過ごすことが出来ました。

留学生とは主に英語で話しました。英語が伝わらないともどかしいので、普段は翻訳機を使って会話をしました。また登下校の時などは、毎回話す話題を事前に考えていました。話す話題が見つからないときは、他のホストファミリーの子にアドバイスをもらいながら一緒に帰るなど、ほかの留学生とも協力しました。ほかに、留学生に多くのことを経験してもらうために、ホストファミリーが積極的にこれにチャレンジしてみよう、ここに行ってみようなどと誘うと良いと思いました。例えばコンビニへ行くだったり、セーラー服を着てみたり、やりたいことを質問する以外にも誘ってみる、というのが大事だと思いました。

次に、普段の学校生活についてです。授業では、体育や書道が楽しかったと言っていました。特に書道は、漢字がとても上手で本当に驚きました。また、アカデミック英語や中学1年生の英語のグループワークも楽しかったようでした。放課後は、部活は陸上部、バレエ部、茶道部など、いろいろな部活を体験していました。また、図書館に行ってみたり、自販機でパンを買ったりもしていました。帰った後は、弟と遊んだり、母や姉と会話をしたりしていました。個人的には、家の中でもっと話したかったです。英検が近くて、勉強との両立がうまくできなかったのが残念です。さらに、日本語を教えることももっとできると良かったと思いました。

最後に、留学生受け入れをして学んだことについてです。学んだことはたくさんありますが、ここではオーストラリアと日本の違いを知ることができたことと、私の英語の実力を確認することができたことについて話します。外国との違いについて、最も印象深かったのはそもそものバッグの中身や大きさです。日本の紙の教科書で大きなリュックが主流なのに対し、外国ではPCが主流なので小さなバッグだけで、翌日の授業の準備もほとんどないそうです。高校生になると教材も増えてくるので、日本のリュックの中身を見て驚いていました。

英語の実力に関しては、実際に外国の人と話すとなると、私の英語力は全くまだまだだなと実感しました。英文がとっさに出てこないのが焦ってしまう時もありましたが、その分もっと英語を勉強しようという気もわいてきました。



留学生の受け入れをして、私も留学する勇気や意欲をもらうことができたし、楽しくてとても貴重な経験でした。ありがとうございました。

バディ生徒感想③（高１ Mさん）



I became a buddy with an international student. There are so many things that I have learned.

When I met the international student for the first time, she seemed a little nervous. I wanted to talk to her and make her relaxed.

Our teachers said that buddies should speak in Japanese when we talked to international students, so I spoke to her in Japanese at first, but it was difficult for her to understand native Japanese. Then, I talked to her in English. She listened to my English with interest even though I did not have confidence in my English-speaking skills. The international students and I had a long chat. We like listening to various kinds of music, so we recommended songs, such as K-pop, jazz music, English songs and so on. It was a very valuable time.

However, sometimes I suffered from communicating with her. At school, there were many events related to international students which students organized during lunch break. When we had to leave the classroom, the international student did not finish eating lunch because she had to change into her school uniform before eating lunch. I tried to give her information that we had to go to the event room, but it was difficult to tell her that in English. Depending on how I say it, I can hurriedly tell her, so I could not tell her that. Eventually, we were late for an event. I caused some trouble. I felt very sorry for everyone about that. Once again, I found that communicating in a foreign language with people was very difficult.

On the last day, the international student gave me a letter. She expressed her gratitude. I was pleased with that. We hugged each other. When I look back, it was a valuable experience. I want to meet her again and thank her very much.

バディ生徒感想④（高２ Fさん）

I decided to participate in a program like this because I went to study abroad. My family accepted me as a host family for the first time so I was a little nervous if I can make friends with Chole at first. But soon, I was able to get a good relationship with her. She has good Japanese skills, so my family and my friends could understand what she spoke even though my family can't speak English.

I was able to let her experience many things in Japan. For example, on weekends, my family let her have a lot of Japanese food and went to shrines and temples, saw fireworks, and took my dogs with her for a walk.

Also, I shared Japanese culture by teaching origami and Japanese words that she didn't know. Lastly, two weeks was such a short time, but it was a really good experience with Brigidine College students.

I will keep in touch with her. I will not forget this memory!



第75回高円宮杯英語弁論大会出場

9月30日、中学3年生1名が高円宮杯英語弁論大会に出場しました。高円宮杯英語弁論大会では、出場者は審査員や観客の前で5分間の英語スピーチを行います。校内選考で選ばれたKさんは、1学期の間から英語科教員とネイティブの先生と英語で議論を重ねながら熱心に準備をしてきました。

スピーチのお題は自由です。Kさんは文芸部の活動で日頃から競技かるたを行っていることから、その経験を通して感じていることを5分間のスピーチにまとめました。Kさんは和歌に対する熱い思いを持っている様子で、自分の伝えたいことが次から次へとあふれ出てくる中、内容を5分間にまとめることに苦戦していました。しかし、当日は原稿を完璧に覚え、流ちょうな英語で立派なスピーチをしてくれました。

残念ながら入選には至りませんでした。この悔しさを胸に今後もスピーチコンテストなどに積極的に参加していきたいという心強いコメントを残してくれました。今回の経験を生かして、今後も様々なことにチャレンジしていってくれることを願っております。

出場生徒感想（中3 Kさん）

ごきげんよう。私が高円宮英語弁論大会に出場して得られた力についてお話したいと思います。高円宮英語弁論大会はハードルの高い大会だと分かっていたのですが、中3になって自分の英語力を試してみたいと強く思ったことがきっかけで出場を決意しました。また、同年代がどのようなことを考えているのかということを知って刺激を受けたかったということもあります。スピーチを作っていく過程では吉田先生、Mark先生に本当にたくさんのことを指導していただきました。スピーチの制限時間は5分間なので、だいたい600～800語を書くのが目安でしたが、こんなにも長く英語で文章を書くのは慣れていなかった上に自分の伝えたいことを前面に出して書くことに苦戦しました。原稿を作る上での当初の課題は“I”が少ないことでした。しかし、先生に自分の好きなことを好きだともっと素直に言って良いのだよ、と言葉をかけられて心が軽くなり自由に表現できるようになったと思います。聴衆が分かりやすく、文を滑らかに繋げる表現方法もたくさん学べました。

原稿を作り終えたらスピーチ練習をします。この段階が1番苦労しました。1つのことを改善できたらまた1つ課題点が見つかり、改めるという繰り返しだったように思います。まずは、暗記した内容を言うことに注力してしまい平坦な口調になってしまうことでした。スピーチというものは感情を込めてこそのものであるのに、文化祭のプレゼンテーションルームで発表した際に撮っていた動画を見たときは愕然としました。ただ声を出しているだけで、全くといって良いほど感情の動きを感じられなかったからです。そこからは感情を如何に込めていくかが課題になりました。経験を語る時にはその時のことを思い出しながら、一番伝えたいことを語る時には強く、時にはジェスチャーを交えて。スピーチらしくするために様々なことを実践しました。すると、制限時間を超えてしまったので、言葉を繋げられるところは繋ぎ、流暢に話すことを心がけ、なんとか制限時間内に収められました。先にも述べたようにスピーチ練習が1番苦労した段階であったかもしれませんが、自分で最も成長を感じられたときでもあったので、とてもやりがいを感じられました。

遂に迎えた本番では朝から緊張していました。午後の部である上に出場番号が後半であったためずっとそわそわしていたのを覚えています。出場者の方たちのゆったりと、はっきりとした声量でネイティブスピーカーのように話されている姿と共に自分の好きなことを追求していこうとする姿勢にとっても感銘を受けました。入賞には至りませんでした。このようなかけがえのない学びや経験が得られたこ

と、名前が呼ばれ、舞台に上がり、たくさんの光を浴びながら思いの詰まったスピーチをしたことは、永遠に私の心に残り続けるでしょう。

吉田先生、Mark 先生、スピーチ練習を一緒にしてくださった天田先生、山下先生、大会に引率してくださった丸岡先生、内容に対する細かなアドバイスをくださった矢澤先生、応援してくれた家族、友人、大会を通じて知り合った大妻多摩 OG の先輩にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。高円宮英語弁論大会に出場したことで得られた成長、思いをスピーチにして人の心に伝えるという楽しさ、英語が大好きという気持ち、結果を出せなかった悔しさ、そして新たに生まれた将来への希望、それら全てを心に抱き私は日々成長し続けます。今回大会に出場し、素晴らしい経験になったので後輩の皆さんにもぜひ挑戦してほしいと思います。

では最後に私が高円宮英語弁論大会で発表した和歌を紹介して締めとさせていただきます。

Burning Feelings have never changed for thousands of years.

It's bottomless. Our feelings burn forever.

Thank you.



中 1 グローバル・インタラクショナルチャレンジ（旧プレ・エンパワメントプログラム）

10月2日(月)から4日(水)にかけて、本校の国際教育プログラムの一環として「グローバル・インタラクショナル・チャレンジ」(略称：グロチャレ)が実施されました。通常のクラスに関係なく編成した5、6人のグループに、日本に留学しているの大学院生が一人ずつつき、英語だけの3日間を過ごしました。

最初は留学生の言葉を全く理解できなかったり、話せなかったりして固まってしまう生徒もいましたが、毎日の活動を通して少しずつ笑顔が見られるようになりました。自己紹介をしたり、留学生の国について学んだり、特技を発表したりするうちに、自分の英語が通じる楽しさも感じたようでした。最終日には、全員がしっかりと英語でスピーチをしていました。

次に、参加した生徒が書いてくれたグロチャレの感想文を紹介します。

参加生徒感想（中 1 0 さん）



私は今回初めてグローバル・インタラクショナル・チャレンジを経験して、いろいろな国の人々と一日中英語だけを話して過ごしました。初めてで不安もありましたが、実際に話してみると、とても楽しく、最初に感じていた不安もすぐに消えてしまいました。

私は幼稚園の頃から英会話を習っていたので他の国の人と話すことに少しは慣れていると思ったのですが、実際に話してみると難しいことが多かったです。けれど日本語を話せない留学生の方たちに

説明したりするときは、私の知っている少ない単語でのカタコトな会話を留学生の方が理解しようと努力してくれました。私もできるだけ相手の方が分かるように努力したことで、お互いの会話がはずんだと思います。また、質問をするときにどのように話したらよいか分からなくて困った時は、グローバル・インタラクショナル・チャレンジ用に配布された冊子を活用したり、友だちと協力して辞書を使って調べたりすることで質問できたので、とても役に立ちました。

私はこれからこの経験を活かして英会話の際に積極的に話してみたり、外国に行ったときに相手の言っていることを聞きとって英語で返せるようにしたいと思いました。また、来年の夏休みにグローバ

ル・キャリア・フィールドワークでオーストラリアに行くので、その時にも今回のグローバル・インタラクティブ・チャレンジで学んだことを活かしたいと思います。

参加生徒感想（中１ Mさん）

「時間の重みと英語学習」

私は以前人生の在り方についての本を読んだことがある。「人はみな同じ人生という器を持っている。それに感情や経験という水を入れ、満たしてゆく。水は『一瞬の出来事』で注がれることが多い。」その本には確か、そう記されていた。なぜ一瞬のことが多いのか、私にはわからなかった。だが、今回私が参加したグローバル・インタラクティブ・チャレンジを通して少しだけ理解できたような気がする。

私はグローバル・インタラクティブ・チャレンジで色々な人と関わること为目标にしていた。人見知りや英語が話せない、自分に自信がない私にとって達成できるか分からない目標だ。

一日目には留学生に質問をするコーナーがあった。勇気を出して質問をしてみた。変な英語だったが優しく答えてくれた。そのおかげで目標を達成することができた。

しかし、2日目の最後の時間で問題が起きた。全員得意なことのショーをすることになっていたのだが、私だけ出し物がなかったのだ。ずっと考えていたが、一向にアイデアは浮かばなかった。だから勇気を振り絞って留学生に相談してみた。すると優しく接してくれたうえにスピーチをするというアイデアを考えてくれた。そして私はそのアイデアを使うことにした。

スピーチが終わると、私は凄く感動していた。何故だか分からなかった。周りの人や自分にとっても人生の中ではちっぽけなことなのに。

その瞬間私は思い出した。前に読んだ本のことを。その時私の人生の器には水が注がれていたのだ。一度冷静になり他の人を見てみると、ショーが終わっても感動した素振りではなかった。私は理解した。

「同じ時間を過ごしていても人によって経験の重みが違う。例えばその経験が一瞬でも、それは大切な時間になる。」ということ。

私は時間の重みについて考える機会を作ってくださった先生方に感謝している。もちろん、英語も上達していると実感している。これからも過ぎていく時間を大切にしながら色々な事に挑戦していきたい。



中３ 広島修学旅行（グローバル・キャリア・フィールドワーク代替旅行）



10月2日(月)から5日(木)にかけての3泊4日で、中学3年生は広島・神戸方面へ修学旅行に行ってきました。この旅行の目的は、国際的視野を広げ異文化に触れる、平和と戦争について考える、規律正しい集団生活を体験する、というものでした。

行程の3日目は、広島大学や神戸大学に海外から来ている留学生と1日過ごしました。初めにホテルで簡単な自己紹介をしたあと、広島の街を留学生とともに散策しました。

午後はホテルに戻り、お互いの国のことを紹介しあって、それをポスターにまとめ、最後にプレゼンするというワークショップを行いました。いつもはもの静かな人が積極的に手を挙げて発言し、周囲をわかせる場面もあって、この日は留学生からの刺激を受けて自分の殻を破る経験ができた1日になったのではな

いかと思います。

この学年は、もともと中2のときにオーストラリアに行く予定だったのですが、新型コロナウイルスの影響で行けなくなり、悔しい思いをしてきました。結局、中学3年次に広島・岡山方面に行っていた本校のこれまでの修学旅行に国際教育の要素を加えて修正し、今回の旅行となりました。オーストラリアに全員で行けなかったのは残念でしたが、今回、日本の歴史、文化、戦争の悲惨さや平和の尊さなどを学び、この旅行で良かった！と言っている生徒もいました。

今回で最後となる本校の広島方面への修学旅行。皆さんに喜んでもらえて有終の美を飾ることができ、嬉しく思います。



参加生徒感想①（中3 Kさん）

私たち中学3年生は3泊4日の修学旅行において、日本に留学されている外国の方と交流しながら広島市内を見学するという国際プログラムを行いました。この国際プログラムでは、留学生と私たち生徒とは「先生と生徒」の上下の関係ではなく、「友達」のような対等な関係であると最初に伝えられました。ですが私は自分の英語の能力に自信がなく、さらに私は班の班長として、積極的に留学生と話さなければと、少し責任感を感じながらプログラムに挑もうとしていました。しかし、実際に留学生と会話していくうちにお互いの知らない英単語や日本語を教えあうことで間違ってもいいんだと肩の力を抜いて楽しい時間を過ごすことが出来ました。

また、広島市内を見学した後は、留学生の出身国と日本との文化の違いや見学して発見したことなどを短い時間でまとめ、ほかの班に英語で発表する機会もありました。私は元々リスニング力に苦手意識があったのですが留学生とちゃんと会話出来たことで少し自信を持つことが出来ました。一方で自分では気づけていなかったスピーキング能力が欠けていることにも気がつくことが出来ました。

この国際プログラムでは英語力はもちろん、留学生と積極的に話すという根本的なコミュニケーション能力、そして短時間で発表を作成するプレゼンテーション能力が養われたなと思いました。

実際に修学旅行の約1か月後にシアトルに住んでいる叔母夫婦(叔父がアメリカ人)が日本に帰省してきた際、国際プログラムの経験があったからこそ英語で話すことに抵抗を感じず、積極的に聞いたり会話していたりしたら、家族からこんなに話せると思っていたなかつたととても驚かれました。

今まで英語が話せた方がいいということはなんとなくでしか分かってい wasn't でしたが、国際プログラムを通してそして、実際に英語を使った留学生との交流を通して英語の楽しさと必要性を学ぶことが出来ました。

参加生徒感想②（中3 Sさん）

We went to Kobe and Hiroshima for four days. This was our first multi-day school trip. So I was very excited but a little nervous.

During our school trip in Hiroshima, we had time to speak with a foreign student who was coming to Japan to study at a Japanese University. We were divided into groups of four students, each group with an international university student coming to Japan from various countries. And we had a chance to visit places in Hiroshima.

I was able to speak and visit places with two senior buddies (foreign university students). My group went to Hiroshima Castle and ate ice cream. It was very exciting talking to them because they both

were from different countries I had never been to. One senior buddy I had in our group was from Afghanistan and the other was from Thailand. I heard many new interesting stories I didn't know. For example, when we ate ice cream the senior buddy from Afghanistan told us about the hand-made ice cream. He told us that in his home country, it gets very cold and snows a lot, so it is popular to make hand-made ice cream.

To conclude, I really had a great time with them. I believe throughout this program you will be able to accept diversity and get to know other country's cultures and ways of thinking by speaking with people from other countries.

第4回 SB Student Ambassador 東日本ブロック大会参加

10月22日(日)、第4回サステナブル・ブランド国際会議(以下SB会議) 東日本大会に高2の3名が参加しました。中間考査の中日でしたが、この3名は昨年と同じ会議に参加し、(テストはとても気になるが)今年度も是非参加したいという強い意志を持って参加しました。



事前に4つのテーマが与えられ、本校生徒は、日本貨物鉄道株式会社による「モーダルコンビネーションでサステナブルな社会へ」に参加しました。物流業界では『2024年問題』を抱えており、サステナブルな物流を実現することは大きな課題です。ネットショッピングを利用する消費者は「翌日配達」を求めがちですが、1週間の配達期間を許容することで物流業界的には大きな違いを生むようです。注文したものがどのように運ばれてくるか、またスーパーで売っているものはどのように運ばれてきているか等、普段我々はあまり意識していませんが、もちろん多くの人々が関わっています。

このSB会議は、初対面のメンバーとのディスカッション(90分間)を通し、これからの社会的課題に対し解決策を考え、最後にグループで発表します(5分間)。校内でのプログラムではなかなか得られない経験です。今回は中間考査の間で3名の生徒しか参加できませんでしたが、来年はより多くの生徒が参加できることを願っています。

参加生徒感想(高2 Nさん・Iさん)

私たちは Student Ambassador に参加しました。その中でもグループディスカッションは私たちを大いに成長させました。初対面の方たちと意見を交わすことで、お互いを高めあうことができ、地球の環境問題について学ぶだけでなく、主体性を身に着けるきっかけになりました。前は高校1年生の時に参加したため、上級生に頼ってばかりで自分の意見を率先して出すことはできませんでした。

しかし、今回は二回目の参加ということもあり、グループをまとめ、発表まで導くことができました。SBでは毎年、企業の方からのお話を聞く機会があります。そのお話から事業の問題点や新たな事業に対する提案を考えます。私たちは日本貨物鉄道株式会社の方からお話を伺いました。特に自分が普段利用しているトラックのCO2排出量の多さやトラック運転手の働き方改革による2025年問題について興味を持ちました。そして、グループディスカッションを通してそれらの解決策を考え、共有し発表しました。

初めて顔を合わせた他校の生徒たちとのディスカッションは刺激的で自分にはない考えを取り込むことができ、非常に有意義な時間となりました。その中でも印象に残ったモーダルシフトを活用した解決策を紹介したいと思います。JRの貨物列車と私鉄の連携を強め、コンテナ間への交通手段にすることや最寄り駅からコンビニまでの移動手段にUber Eatsのような新しいビジネスを展開し運んでもらうのがよい

のではないかと思います。このようにすることで、二酸化炭素の排出量が多いトラックの使用を減り、二酸化炭素を排出しない自転車を利用が増え、環境にやさしい SDGs に配慮した運送システムが完成します。このような未来を見据えた近代的な案はこれからの社会に必要となるでしょう。

S Bのような大きな場で自分たちの提案を企業の方に説明できたことは、とても大きな自信となるとともに、環境問題について他人事でいるのではなく、自分事として考える大切な機会になりました。私たちはこれからも、自分の考えを発信していくことや環境問題について考えることを絶やさずに続けていきたいと思っています。

第9期 東京都「おもてなし親善大使」育成塾参加→任命

【東京都 HP より】

- ・おもてなし親善大使とは…おもてなしの心を持って、東京を訪れた外国人旅行者に都内の観光スポットを案内する中高生のボランティアです。育成塾を修了し、大使に任命されると、年間を通しておもてなしを学ぶ研修・活動に参加することができます。
- ・おもてなし親善大使の任期…任命された日から当該大使が18歳に達する年度の末日までです。
※任命後の研修・活動は、任期を過ぎた22歳までの学生（社会人を除く）も参加可能です。
- ・「育成塾」の内容…以下の日程（2日間）を通して、東京の観光案内をするために必要な知識を学びます。
1日目（座学講座）都内観光地・歴史・文化等の知識や外国人へのおもてなしの手法等について学習
2日目（観光体験学習ツアー）都内の観光スポットを巡り、実際に「おもてなし」を体験

参加生徒感想（高1 Kさん）

私は2023年7月に東京都が都内在住、または在学の中学生・高校生を対象に実施しているおもてなし親善大使育成塾に参加し、10月に第9期おもてなし親善大使に任命していただきました。今回はおもてなし親善大使のプログラムでどのような活動ができるのか、活動に参加してどのような経験を得ることができたのかについてお話しします。

おもてなし親善大使育成塾は2日間に分けて行われ、1日目は座学の講義を受け、2日目は実際に自分たちがおもてなしの体験をします。1日目の講義は、外国人観光客に人気の都内のスポットや、東京の伝統工芸品、おもてなしの心などのおもてなし親善大使として活動するうえで大切な知識をたくさんの方から伝授していただきました。そして2日目は実際に浅草に行って人力車体験や、様々なツアーに参加し、同期の親善大使の方との関係を築くことができ、とても楽しく、学びになる2日間を送ることができました！

また、任命されてからは、原宿のツアー体験や、外国人観光客に折り紙を教えるイベントなど様々なプログラムに参加する機会があります。私が参加したプログラムでは、外国人留学生の方と親善大使数人で班になり、留学生の出身国について英語で話を聞き、他の班の前で英語でプレゼンをするという活動をしました。

このように、おもてなし親善大使の様々な活動を通して英語を話す機会やコミュニケーション能力を向上する機会を得ることができ、英語が通じる喜びなどを感じています。今後もおもてなし親善大使の活動を通して、たくさん英語に触れ、外国人の方たちに東京都の魅力を発信したいと思います。

おもてなし親善大使は、毎年夏休みに行われている育成塾に事前に申し込み、参加することで任命してもらうことができます。しかし、育成塾に参加するには、英検3級以上に合格、もしくはそれに準ずる英



語力を有していて、倍率の高い抽選を突破する必要がある、申し込めば必ずしもなれるというわけではありません。そこで、おもてなし親善大使になりたいという方への私からのアドバイスは、申し込む際に自分なりの志望理由やおもてなし親善大使になったらどんなことをしたいのかを明確に文章で表し、熱意を伝えることが大事だと思います。

この文章を通して少しでも興味を持った方はぜひ挑戦してみてください！

〔生徒発案〕 Mufti Day の開催

11月9日(木)、この日を「Mufti Day」とし、私服での登校もOKとしました。この企画を提案したのは昨年ニュージーランドへターム留学へ行った高校3年生の3人です。この日の様子はニュージーランド大使館のFBでも紹介されました。

「Mufti Day」とはどのようなものなのか、実施のねらいは何かといったことについて企画者の3人が書いてくれた文章を以下に紹介します。3人が何度も教員側と交渉を重ねてこの企画の実施にこぎ着けたことは、これから大学生、そして社会人になってからも活かせるよい経験になったのではないかと思います。

3人が言うように、これをきっかけに皆さんが募金活動に目を向けるようになってくれること、さらには、募金活動を通じて社会で起きている問題に興味・関心を持つようになってくれることを期待しています。



発案生徒感想 (Aさん、Mさん、Wさん)

(英語版)

We're third-grade high school students and planned this project, Mufti Day. We studied abroad in New Zealand during the third semester of our second year of high school. While attending local schools in Auckland, Christchurch, and Dunedin, we experienced a New Zealand cultural event called Mufti Day.

Mufti Day is an event that is held once or twice a year in New Zealand's schools, most of which have school uniforms like Japanese schools. On Mufti Day, the students go to school, wearing whatever clothes they want, and donate golden coins, valued at 100 or 200 Japanese yen.

The donation purpose of Mufti Day changes each time, but the donation purpose of this time was to support single parents.

As we had been impressed with the idea that students go to school wearing casual clothes and donate some money, we wanted the students of our school to experience this cultural event and started the project.

It was difficult to get the teachers to understand because the school has a school uniform and there was no precedent of a non-uniform day. Through the program, we could learn what kind of preparations we need to realize what we want to do.

On Mufti Day, the students who wore their clothes instead of the school uniform and donated some money were much more than we'd expected. Thanks to them, we were able to collect 108,755 Japanese yen. All the money will be sent to Florence, a nonprofit corporation, and will be used for support of single parents.

We got the impression that the students got involved in this project proactively and joyfully. We hope this project was a good opportunity for the students to pay attention to donation and New Zealand culture.

Lastly, we really appreciate the teachers who allowed this project and all the students who participated.

（日本語版）

今回の Mufti Day を企画した私たち高校 3 年生 3 名は、高校 2 年生の 3 学期にニュージーランドでターム留学をしました。それぞれオークランド、クライストチャーチ、ダニーデンの現地校に通い、そこで“Mufti Day”というニュージーランドの文化を体験しました。

Mufti Day とは、日本の学校と同じように制服の多いニュージーランドの学校で年に 1、2 度ほど行われる文化で、私服で登校する代わりにゴールドコイン（\$1、\$2 硬貨。日本円で 100 円から 200 円ほど）を募金する日です。Mufti Day の募金目的はその都度変わるのですが、今回はひとり親支援を募金目的としました。

「学校に私服を着てきて、募金をする」という、日本では今まで体験したことのない文化がとても印象に残ったので、ぜひ大妻多摩の生徒にも体験してほしいと考え、この企画をスタートさせました。

元々制服がある大妻多摩で、先生方にこの企画を理解してもらうことは大変でしたが、自分たちがやりたいことを実施につなげるまでにどのような準備が必要なのかを学ぶいい機会になりました。

当日は予想よりも多くの生徒が私服を着て登校し、募金活動に参加してくれました。おかげで、108,755 円の募金が集まりました。このお金は NPO 法人フローレンスに送り、ひとり親支援をはじめとする、子ども支援に使っていただく予定です。



この企画に生徒の皆さんが主体的に、そして笑顔で取り組んでくれていた印象を受けました。これを機に生徒の皆さんが募金活動というものに目を向けるきっかけになれば幸いですし、ニュージーランドの文化や習慣に関心を持ってくれれば嬉しいです。

最後に、この企画を許可して下さった先生方、参加してくれた生徒の皆さんに感謝します。

朝日新聞社見学

参加生徒感想（高 3 K さん）

今回の朝日新聞社への見学を通して、朝日新聞ならではの特徴、新聞が作られる具体的な過程、そしてウクライナ情勢を主とした現在の国際情勢について学び、新聞という一つのメディアに対しての知識を深める貴重な機会を得ることができた。見学をする中で数多くの発見に出会えたが、私にとって特に印象的だったのは朝日新聞のその歴史の長さだ。過去の出来事や反省から学び、それを反映させた社内の構造や情報発信に対する考え方は朝日新聞がどれほどの歴史を積み上げてきたかを実感させるものだった。実際に社内に足を踏み入れ、新聞が作られている現場を目の当たりにしたことで、朝日新聞はなぜ時代を超えてこれほどまでに人々に愛され続けているのか、そのほんの一部かもしれないがわかったような気がした。

朝日新聞では常にわかりやすく、そして確かな情報を提供し、読者が信頼できるように意識されていた。それは朝日新聞が記事と同じくらい写真を重要視し、用途別に数多くのカメラを所有していたり、ヘリコプターを保有して災害時でも取材を行えるようにしていたりすることにも表れていると思う。たとえちよ

った内容の記事だったとしても、写真にこだわるという姿勢が、記事にその場の臨場感を持たせ、状況を視覚的に読者に伝え、よりわかりやすい記事に仕上げたのだろう。また、国際報道部の根本さんからウクライナ情勢についてのお話を伺った際に、朝日新聞ではいかに最前線で取材をしていて、確かな情報源による情報を発信しているかに気づかされた。特に世界情勢に関しては、日本にいと、実際にそこでは何が原因でその出来事が起きていて、人々はそれに対してどういった様子なのかを知る手段が限られてしまいがちだ。そのため、現場の最前線で得た確かな情報を提供することで、読者はより細かく、そしてよりリアルな情報を得ることができ、安心して信頼できるだろう。このような読者へ向けた意識こそが、朝日新聞が長い間親しまれている一つの理由であるように思われる。

また、朝日新聞は時代の変化に柔軟に対応している。現在インターネットやテレビの出現によって、人々の紙媒体のメディア離れが加速しているが、朝日新聞ではこれに対してデジタル版の新聞を作成していた。社内にはラジオ局のような施設も設けられていて、そこではアプリで聞けるポッドキャストを配信するなど、新聞に親しみがない若者にも新聞の代わりとなる新たな手段で情報を提供し、身近に感じられるような工夫がされているようだった。他にも、最近ではジェンダー平等が注目されつつあるが、朝日新聞では記事を担当する男性、女性、そしてLGBTQの人々との比率を平等に定めるなどが具体的に規定されていて、時代の変化によって生じる課題に対して柔軟に対応していた。歴史があるにも関わらず、古い考えに固執せずに、新たな形で発展し続けるという臨機応変な姿勢もまた、朝日新聞の長い歴史を支えているように感じた。

この朝日新聞社の社内見学を経て、朝日新聞の長い歴史を感じ、それを支えているいくつかの事柄を発見したと共に、新聞という立場から情報を発信することの意義や本質に触れたように思われる。情報に溢れている今の社会とそれに対する自身のあり方を見つめ直す良い機会を得ることができた。

パレスチナ講演会

1月27日(土)に、生徒ならびに保護者約60名を対象に、NPO法人「パレスチナ子どものキャンペーン」の田中好子事務局長による、パレスチナに関する講演会が開かれました。

ガザ地区では昨年10月以降、現地を支配するハマスという組織とイスラエルとの間で武力衝突が続いており、数多くの難民が発生しています。このNPO法人は実際に現地に職員がおり、難民に対して生活や食糧の支援を行っている団体です。今回はガザ地区の概要や現地に滞在するNPO法人の職員の話聞き現在の難民支援の状況などをお話し下さいました。その後の質疑応答では、人質を解放し、武力衝突を終わらせるためには誰がどのように動くことが大切なのか、現地のハマスに対する評価はどうか、などの質問が出て、非常に有意義な会となりました。田中氏のいう「まずは現地のことを知ることが大切」との言葉を受けて今後も注視しつつ、生徒達は起こっていることを積極的に調べて、自分には何ができるのか、考えて欲しいと思います。

参加生徒(高2 Gさん)

「パレスチナ子供のキャンペーン」事務局長の田中さんから直接お話を聞くことができました。講演会では難民キャンプでの生活の様子や支援の内容について、写真や動画を交えながら説明がありました。

中でも印象的だったのは、「戦争を終わらせるためにはイスラエルの世論を動かすことが鍵となる。」という説明でした。そこで私は「世論を動かす上でどの国が鍵となるのか。」という疑問を抱き、田中さんに



質問をしました。すると、「アメリカのユダヤ人である。」と田中さんは答えてくださいました。また同時に、何よりも人質解放を優先すべきだともおっしゃっていました。

講演会を通じて私たちに出来ることは「知ること」だと考えました。私が講演会に参加した理由の一つに、今世界で何が起こっていて、どれだけの人が普段の生活を奪われているのかを「知りたい」と思ったからです。直接的に何かできなくても「知ること」は決して無駄だとは思いません。実際に、私自身講演会を通じてパレスチナ問題に関心を持ち、国内外のニュースを見て情報を収集しています。また、昨年から様々な活動に参加してきたロシアによるウクライナ侵攻問題についても引き続き情報を追っています。

ニュースや SNS などのメディアを通じて、皆さんもこの問題について考えてみてください。

「大妻中野中学高等学校 第10回グローバル教育発表会」参加

2月14日、「大妻中野校 第10回グローバル教育発表会」に大妻多摩の生徒代表として、高3生2名が英語で発表しました。（本校 HP に実際の発表動画がアップされていますので、ご興味のある方は是非ご覧ください。）

1名は「つまたま保育クラブ」での経験、他の保育所（インターナショナルの保育所含む）でのボランティア体験、それらの経験を将来の職業へどうつなげるかについて発表しました。

もう1名は「心地よい音楽を数学で奏でる」を題材に、国内外で様々な賞を受賞している生徒です。今回は英語での発表なので、初めて聞く聴衆に内容が伝わるよう、難しい単語も英語で完璧に覚え、パワーポイントに合わせて本番まで何度も練習を重ねました。

本校生徒の発表内容、自信を持った発表の様子もさることながら、“away”である大妻中野校の舞台でも、まるでホームグラウンドのように自然に中野のネイティブの先生方と接する姿に、中野校の先生方にも大変お褒めの言葉をいただいて帰ってきました。

大妻学院各中高の連携を強化する意味でも有意義な発表会となりました。来年度以降も、本校生徒にこうした他校との「コラボ」の経験を与えてゆければと思っています。

参加生徒（高3 Tさん）

私はステージに立って何かを発表した経験がほとんどなかったため、最初は不安で、ステージに立っていることを想像するだけで緊張していました。実際、3学期になり初めて先生方の前で練習をした際には、教室での練習であつたのにも関わらずとても緊張し、自分でも何を言っているのか分からないくらいの状態でした。しかし、学校や自宅、大妻中野校など様々な場所で練習やリハーサルをしていくうちに次第に緊張なくなり、本番ではリラックスした状態で楽しんでやることができました。楽しんでできた事に驚いた自分もいましたが、見ていた方々からも「堂々としていた」という言葉をいただきとても嬉しかったです。大妻中野校の先生方や生徒とも交流し、中野生の英語力の高さを知り自分にとっても良い刺激となりました。

大妻中野校の「グローバル教育発表会」に参加し、スピーチをする事だけではなく、全てが自分にとってプラスの経験となり、多くのことを学ぶことができました。今回学んだことを生かし、これからもいろいろな事にチャレンジしていきたいです。



参加生徒（高3 0さん）

大妻中野「グローバル教育発表会」に参加して、大妻中野生の英語力、プレゼンテーション力の高さに感心しました。また、英語だけに限らずフランス語の発表があることにとても驚きました。これからも他校との関わりを大切に、良い刺激を受け合うことが重要だと実感しました。

私は研究発表の経験がありましたが、今回は発表時間が短かったため英語・日本語混合の PowerPoint に改良し、途中で要約のページを入れることで、聴講者がより簡単に研究を理解できるように工夫しました。

去年、海外で研究発表した際には通訳の方が付いてくださっていたため安心感があり、思う存分研究を語ることができました。しかし、今回は一人でステージに立ち、一人で質疑応答をしたため不安でしたが、大妻多摩の先生が当日まで毎日練習に付き合ってくださいだったため伝えたいことを伝えきることができました。これから大学生になってからも英語での研究発表があると思います。今回はそのための良い経験になりました。

「グローバル教育発表会」に携わってくださった大妻中野・大妻多摩の先生方、審査員の方々、関係者の方々に感謝申し上げます。



東京ジャーミィ・トルコ文化センター見学

3月6日（水）イスラームに対する理解を深めるため、代々木上原にある「東京ジャーミィ・トルコ文化センター」を参加希望者17名で見学しました。「ジャーミィ（Camii）」はトルコ語で「大規模なモスク」を意味し、「人の集まる場所」を意味するアラビア語を語源としていると言われています。

本校では、海外プログラムの1つとして「トルコセミナー」を約10年前から実施しています。昨年度も企画しておりましたが、昨年11月中旬に発生したテロにより、残念ながら中止となってしまいました。今春、14名の生徒が数年ぶりのトルコセミナーに参加予定です。



見学当日はまず1階の多目的ホールにて、東京ジャーミィの総務・秘書担当を務めるアイシェさんに、イスラームについてレクチャーしていただきました。アイシェさんは、来日後に勉強したとは思えないほど、流ちょうな日本語で、トルコと日本との関係やイスラーム文化の話を紹介してくださいました。後日、本校でのトルコ語セミナーでも講師を務めてくださいました。

その後、2階へ移動し、女性は持参したスカーフを頭に巻き、神聖な場所である礼拝所で、午後3時の礼拝の様子を見学しました。次々に国籍が異なる人々が集まり、一緒になってお祈りを捧げている姿が大変印象的でした。

当日案内を務めてくださったアイシェさんは、トルコと日本の大きな架け橋になることがご自身の目標だそうです。大妻多摩の活動にも大変興味を持ってくださり、これから何か機会があればお手伝いしていただけるということでした。この良いご縁に感謝しつつ、また近い将来一緒できることを楽しみにしております。

生徒感想（中3 Sさん）

東京ジャーミイは内装、外装ともに綺麗で、とても心が落ち着く場所だと思います。

礼拝の様子を見学させてもらったとき、「私がイスラム教徒になったら一日に五回も忘れず礼拝できるのかな？」と思いました。しかし、イスラム教徒の皆さんにとって礼拝することは当たり前のことなのです。

私は東京ジャーミイの見学を通じ、日本との文化の違いや異なる価値観を学ぶことができました。私たちは、このことが彼らにとっては当たり前のことなのだと理解することが大事だと思います。

また、東京ジャーミイには物産店もあり、イスラム圏の料理や道具などがたくさん売られています。私のおすすめは、「バグラヴァ」というスイーツです。とても甘くておいしいです。

皆さんもぜひ、異文化への理解を深めに東京ジャーミイに行ってみてください！



ターム留学 高1・高2の計29名が3学期に海外へ！



12月20日（水）、2023年度ターム留学生の壮行会を開きました。オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、カナダの各方面で、29名が3学期を過ごします。校長より「留学許可書」が手渡され、学校を代表するターム留学生としての自覚が高まりました。

今年は、自分だけのターム留学にすべく、現地での「研究テーマ」を昨年以上に重要視しています。テーマを選んだ理由、現地でのリサーチ方法、帰国後進路へどのようにつなげていくのか等について、それぞれが深く考え、留学生間で共有しています。帰国後の成果報告書を読むのが楽しみです。

大学生でも、社会人でもなく、高校生の立場で家族を離れ、海外で2～3か月を過ごすことには大きな意義があります。周囲の方に感謝しつつ、実りある日々を過ごし、無事に新年度に会えることを楽しみにしています。

オーストラリアコース留学生 中間報告書より1部抜粋（高1 Kさん）

◎学校について

授業は日本の学校のように先生が教室を移動するのではなく、生徒が自分の授業の教室に移動するスタイルです。移動が5分しかないため生徒たちは授業が終わる頃に片付けを始め終わりのチャイムが鳴つたと同時にものすごいスピードで教室を出ていきます。

通い始めて2週間くらいは先生の話すスピードが速くて聞き取れなかったり、教科書に書いてある単語が難しく、自分でワークを進めたりすることができませんでした。留学に来てから毎日自分の語彙力のなさを痛感しています。最近はみんなの意見をメモしてワークを進めて、自分がわからない単語があるときは調べてまとめるようにしています。

私が一番むずかしいと思うのは Religion です。この授業では神とはどんな存在かについて話したり、羊使いと神がどのように結びついているかについて動画を見て自分の考えを書いたりします。初回の授業では動画を見て問題を解くという作業がありましたが、動画を見返しても全く内容が理解できず困っていま

した。すると隣に座っていた Year10 の生徒が「内容わかる？大丈夫？」と言ってくれました。私が全然わからないと言うと、「留学で来てこんな難しい授業を受けているなんてすごいことだよ。もしこの授業が日本語になったら私は理解できないよ。」と言ってくれてとても勇気づけられました。

また、「この考えに対してどう思うか。」などを一人一人発表する場面がとて多く、ホームルームでは「週末に何をしたか。」「先週の学校でのハイライトは。」などを話したりします。最近は少し慣れてきてもし間違っているだけでもできるだけ多く話すように頑張っています。ホームルームのクラスの子たちや先生は話をよく聞いて質問してくれるのでとても嬉しいです！

◎印象に残っている出来事

留学に来て一番実感していることはオーストラリアでは日本よりも「自分がどう思うか」、「自分がどうしたいか」という個人の意見がとても重要で、それを人に伝える機会がとて多くあるということです。メリットとしては意見が尊重されているんな視点から物事を感じることができます。しかし、逆に言うとなんて自分でどうにかしなければいけない場面が多く、大変なこともここに来てたくさん経験しています。

また、日本より人と人の距離がとて近いと感じます。特に学校では全く話したことがない子ともグループになって話したり、違う学年の生徒たちも私達を見かけると話しかけてくれたりします。日本語の授業をとっている中学生の子たちが習いたての日本語で挨拶してくれたときはとて嬉しかったです。

留学に行く前、ブリジディーンカレッジに通っている生徒と一緒に登校すると思っていました。しかし初日にその生徒が転校してて一緒に行けないということを知られ、とてびっくりして不安でしかなかったです。しかしホストファミリーが「もし私達と話しててわからないことがあったり、理解できなかったらなんでも聞いてね。勇気を出して、私達が力になることを忘れないで。」と言ってくれたのでできるだけ自分で頑張ってみようと思いました。

そしてその次の日にバスの乗り方や学校までのルートを頑張って覚えて学校初日からは一人で登校しました。しかしその初日から Gocard（日本のパスモのようなもの）を忘れてとて焦りながら学校に行ったのもいい経験になりました。

今でも一人で通っていますが、放課後にショッピングセンターのフードコートなどで勉強をしていると隣りに座っていた Year11（高校2年生）の生徒が私の日本語で書いてある問題集を見て「留学生だよな？」と声をかけてくれました。彼女とはその日少ししか話せませんでした。が、日本の学校との違いについて話しました。彼女は海外に興味があり、ボランティアで難民の子どもたちに英語や水泳を教える団体に入っていると言っていました。私はそれを聞いた時、多民族国家であるオーストラリアならではの活動だな、と感じました。

留学が始まってから日本では絶対に経験できないことをたくさん見たり聞いたりできて本当に楽しいです。初めは誰かに話しかけることが怖くて困ったときは他の人に頼っている部分がありました。しかし1ヶ月経って自力でやるという力が身についていると思います。

残りの1ヶ月も今しか経験できないことにたくさん触れていきたいです。



オーストラリアコース留学生 中間報告書より1部抜粋（高1 Yさん）

◎学校について

授業では、ほとんどの科目で OneNote というパソコンのソフトを使っていて、重要なこともそこに書かれていることが多いため、プリントを使うことはほとんどありません。私は English の授業が最も難しいと感じています。English の授業では、Jasper Jones という長編小説を読み進めたり、風刺の動画を視聴して問いに対する答えをまとめたりしています。興味深い授業は Humanities で、この授業では世界各国の開発が進んでいる具合を地域ごとに比べたり、世界で話題となっている指標について調べたりしています。Brigidine College の授業は、世界に目を向けさせる機会を設けているものが多いなと感じています。

また、Brigidine College では選択科目を2つ選ぶことができます。私は Digital Design と日本語の授業を選択しています。Digital Design の授業では、定規が縦横自由に動かせるボードを使って立体を描いたり、バス停のデザインを考えたりしています。デジタルデザインの One Perspective という単位では、一つの点から線を広げていくことで、奥行きのある本格的な部屋を描くことができました。Brigidine College では、ある一つのものから考え方を広げていくことが多く、授業内だけでなく学年の生徒と交流する際もこの活動を行うことがあります。これは、自分が今まで気づいていなかった点に気づけたり、別の視点から物事を見ることができたりするため、これからも大切にしていきたい考え方です。

さらに、英語の発音の仕方にも違いがあって面白いです。私は、以前オーストラリアに行ったことがある祖父から、オーストラリアの人たちは Today や Monday を「トゥダイ」、「マンダイ」と発音するよと聞いていたため、ホストファミリーや Brigidine College の生徒の発音を意識して聞くようにしていました。ホストファザーやニュースのキャスターは「マンダイ」と発音しているのに対し、Brigidine College の生徒たちは「マンデイ」と発音していたため、ざっくり言うと世代による違いがあることがわかりました。その他にも、favorite を favourite、center を centre と書くなど表記の違いがあって面白いなと感じました。

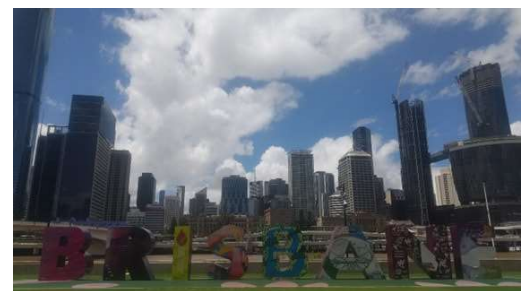
◎生活について

オーストラリアでは、車に乗っているときシートベルトを着用していれば、カーナビを使用し通話ができたり、音声認識機能を使って口頭でメッセージを送ったりすることができます。しかもこの機能は日本の自動車会社の車に搭載されていたため驚きました。

他にも、オーストラリアではクレジットカードがとても浸透していて、私は今までに現金を使う人をほとんど見かけたことがありません。Brigidine College の購買部など、現金が使えない店があることを知った際には驚きました。日本も将来はカード決済が一般的になるのかなと思い、まるで未来の日本にいるような感じがしています。このように、オーストラリアでは IT の高度化が進んでいます。

私はオーストラリアに留学してからほとんど自転車を見かけていません。みんな通学にはバスや電車を使っています。ブリスベンのサウスバンクという街には、スクーターが置いてあり、日本では都心部くらいでしか見かけないため普及率が高いなと感じました。

その他にも、初日にホストマザーから「ごめんなさい」ではなく「ありがとう」と言おうというアドバイスがありました。これはとても自分の中で印象に残ったことで、オーストラリアの人々は相手に言われ



た言葉をそのまま受け止めてしまうことが多いと聞きました。このことから、私ももっと言葉を大切にしたいと思いました。

日々新しい発見があり、周りの友達から刺激を受けつつ毎日楽しむことができます！ホストファミリーや友達、先生、日本にいる家族に感謝の気持ちを忘れずに、残り約半分ですが1日1日を大切に頑張っていきたいと思います！

ニュージーランドコース留学生 中間報告書より1部抜粋（高1 Aさん）

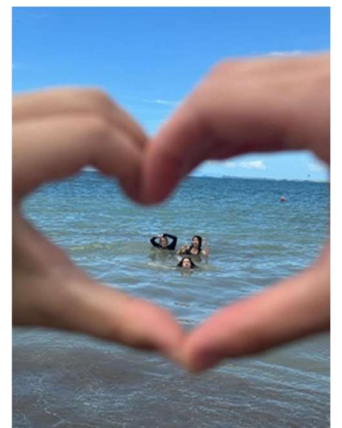
◎学校について

私は今、全校生徒が約1000人のカトリック系の女子校に通っています。少人数ですが、ニュージーランドが多民族国家ということもあり、インド系・ヨーロッパ系・ニュージーランドの先住民族であるマオリなど様々な国籍の生徒がいます。学校は、日本にはない Morning tea というお昼ご飯の前にお菓子を食べられる時間や Atawhai という時間があります。

ハリーポッターのように学年混合で6色にグループ分けがされていて、Athletic day などのイベントがある時は、このグループでポイントを競っています。また、Atawhai の時間にはオリエンテーションをしています。学年混合のグループなので色々な年齢の友達を作ることができます。

授業の仕方も大きく異なり、日本のような講義型授業は少ないです。例えば、経済では、自分たちで予算や作るお菓子、パッケージを1から考えます。実際に生徒や先生に販売する機会もあり、どのように利益を生み出すのか、商売の難しさを学ぶことができ、そして、目標を達成した時の達成感を感じることができます。マーケティングに興味のある私にとってこの授業はとても楽しく、一番大好きな科目です。経済だけでなくドラマや宗教など日本にはない科目が多いので毎日の授業がとても楽しいです。

私の学校にはバディ制度というものがありませんでした。そのため、初めの2日間自分から積極的に話しかけることもできず、なかなか新しい友達をつくるできませんでした。しかし、ここに来た理由を思い出して「今ここで声をかけないと、この先一生後悔する」と思い、同じドラマのクラスの子に声をかけました。今ではその友達を含め8人の友達と毎日ご飯を食べたり、休日には一緒にビーチに泳ぎに行ったりしています。この出来事を通して、自らが行動することの大切さを学びました。



◎日常生活について

ニュージーランドは幸福度ランキングが世界で8位ということでも知られているのですが、その理由がここに来て少し分かった気がします。自分の国の文化を大切にしながらも、相手の国の文化に対して尊敬の気持ちを忘れずに受け入れられていることや、相手がどこの国籍であろうが分け隔てなく接していることなどが多くの方が幸せだと感じることに繋がっているのではないかと思います。

また、街に出かけるとすれ違う人が“Hello!”と声をかけてくれたり、買い物をした際には店員さんが“Have a nice day!”と声をかけてくれたりするため、自然と明るい気持ちになります。ニュージーランドはとにかく明るくて、出会う人みんなが温かいので私もすぐにニュージーランドが大好きになりました。

私は、英語で話すことに対して「楽しい」という理由から好きだったのですが、ここに来てから英語で話すことの難しさを知りました。特に、発音は少し違うだけでも伝わらず、ホストファミリーや友達との会話で苦戦してしまうこともあるのですが、私の拙い英語を聞き取ろうとしてくれたり、時には他の友達

と一緒に伝えてくれたりしました。今は、少しでも多くの人とコミュニケーションをとりたいので、正しい文であるかどうかは気にしないで、まずは自分から話しかけることを意識しています。私がいつもお昼ご飯を食べている友達は全員国籍が異なり、英語という一つの言語を通して異なる国の友達と会話するのは新鮮でとても楽しいです。そして、友達やホストファミリーとの会話から、学校では習えない英語を沢山学んでいます。

このような経験は日本ではなかなかできないので留学をさせてくれた家族や恵まれた環境に本当に感謝しています。日本に帰ったときに自分で成長できたと言えるように、残りの1ヶ月も人との出会いと時間を大切に精一杯楽しみながら頑張ります。

アメリカコース留学生 中間報告書より1部抜粋（高1 Tさん）

◎学校、授業について

私が通っているのはイーストレイク高校という学校です。イーストレイク高校は私のホームステイの場所から車で5分と、とても近いです。また、私のお姉さんも同じ学校に通っているので一緒に学校に行っています。学校には沢山の国籍の子がいて韓国人やフィリピン人の子もいます。毎週金曜日にホストシスターとバスケの試合に行っています。

私が受けている授業は1時間目ダンス、2時間目英語、3時間目日本語、4時間目化学、5時間目世界史、6時間目数学です。1時間目のダンスではストレッチやモデルの歩き方の練習を行っています。日本語の授業ではアニメや日本食が好きな子が多く、アメリカと日本のハーフの子もいてとても楽しいです。また、みんなが日本語を話しているのが可愛いです！



◎日本とアメリカの違い

日本の学校では授業ごとに先生が移動していますが、私の通っているアメリカの学校では先生がいる教室に生徒が移動する方式だったのでびっくりしました。メキシコは日本と同じで先生が生徒のいる教室に移動するそうです。また、アメリカの学校は自由でスマホはOK、メイクOK、髪染めOKに加え、授業中にお菓子を食べても良いので最初は少し混乱しましたが最近慣れてきました。

また、車を運転する時日本では右側が運転席、左側が助手席ですが、アメリカではその真逆だったのでびっくりでした。運転も16歳から出来るそうで私のホストシスターもよく運転しています。

ご飯を食べるときは食べきれなかったものはお店に残してしまうことが多いですが、アメリカでは帰る前にボックスというものをくれて食べきれなかったものを入れてくれるというシステムがあります。そのほうが食品ロスも削減できるしいいなと思いました。

まだ英語を聞き取れないことが多いですが、後1か月残っているので英語を聞けるようになってスラスラ話せるように頑張りたいと思います！

カナダコース留学生 中間報告書より1部抜粋（高1 Kさん）

私はカナダのトロント・オタワに留学しています。今年のカナダは暖冬で特にトロントはオタワよりも暖かく、とても過ごしやすかった印象です。私は最初の一週間をトロントで過ごし、残りの2か月弱をオタワで過ごしています。トロントでは雪を見かける機会がほぼなく、スニーカーで行動することが出来ま

した。しかしオタワでは気温が低く雪もたくさん積もっているのでスノーブーツでの行動が必須です。

◎驚いたこと

私がカナダに留学して驚いたことは2つあります。1つ目はトロントのバスの乗り方です。トロントではどんなに短距離でもバスに乗って移動することが多いです。バスに行き先が書いてないのでバスの番号を調べて乗る必要があり、最初は困惑しました。また遅延も多いのでアナウンスなしに30分待つこともありました。しかしバスを待っている私に話しかけてくれる親切な人に会えてとても良い経験となりました。

2つ目は学校の登下校についてです。私の学校の生徒のほとんどが登下校でスクールバスを利用していて驚きました。帰るときはホームルームがないため最後の授業が終わり次第急いで帰る支度をしないとバスに乗り遅れてしまいます。

◎学校について

学校は St. Michael Catholic High School という学校に通っています。この学校には留学生が私たち（大妻多摩生3人）を含め6人しかいないので留学生は珍しいと思います。珍しいですが授業を私たちのために分かりやすくしてくれるわけではないので、自分で分からないことは先生に質問したり、周りの生徒の子に聞かなければいけません。また、私は政治、数学、メディア、サイエンスの授業をとっているのですがほぼすべての授業で課題が出るのでとても大変です。しかし日本では教わることのないような内容の授業を受けることができるのでとても興味深いです。特にメディアのクラスでは海外のメディア広告を見て、この広告がどのような人をターゲットに作られたものなのかを考えて、自分の意見を生徒と共有しました。また他にも、生徒一人一人が自分で広告を調べてこの広告は誰に何を伝えるために作られたのかを考え、共有し、自分の意見とほかの生徒の意見を比較しました。私は、先生の言っていることが分からない、何をやる時間なのか分からない、という時でも諦めずに先生に授業後に質問したり、そのクラスで友達を作って聞いてみたりすることが大切だということを学びました。決して先生や友達と流ちょうに話せているわけではないですが、先生は質問したら優しく答えてくださるし、友達に声を掛けたら相手から話し掛けてくれるので頑張ろう、とやる気が出ます。



残りの日数は少ないですが、自分が成長できるように頑張ります。



Beyond Tsumatama SGL
Global Education Program 2023 Report

大妻多摩中学高等学校

国際教育部

2024年3月発行